

第2章

大村市観光の現状と課題

平成24年3月に見直し計画を策定しました「歴史を活かした観光振興計画」は、「人・まち・歴史・自然が輝く観光交流都市『おおむら』」と将来像を掲げ、(1)観光交流人口の拡大(2)観光消費拡大による経済活性化(3)満足度を高めるおもてなしと観光商品の提供の3つの基本施策によって、様々な事業を行ってきました。

しかし、平成21年から観光客数は100万人を突破したものの、依然として日帰り観光客が8割を占めており、かつ、観光消費規模も伸び難く滞在型観光にシフトできる魅力的な新しい観光施策が要請されています。

今後、観光客のニーズに応じた**観光メニューの開発**と、広域的なルートを構築し、**滞在時間の延長**、並びに、着地型観光を推進するために目的型観光地形成による**観光消費拡大**を図ります。

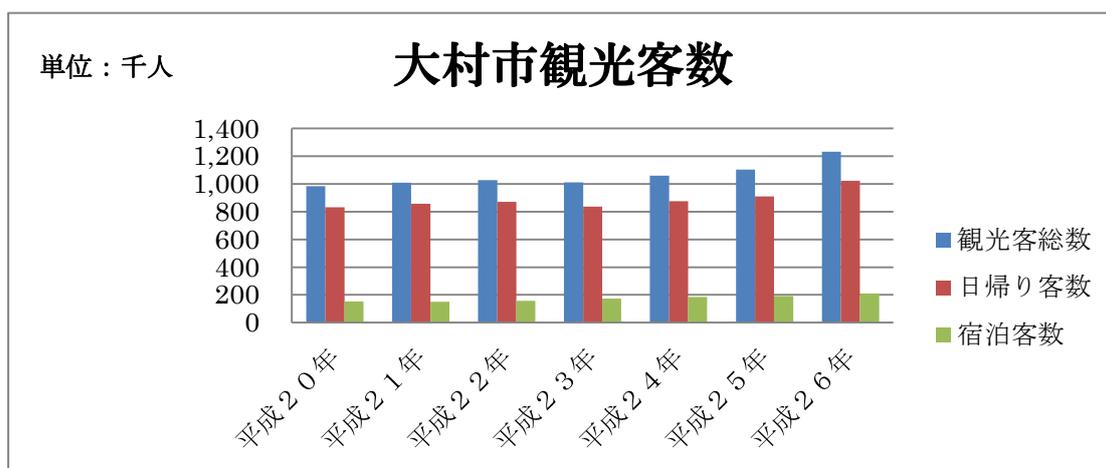
1 観光動向の現状と推移

(1) 観光客数

本市の観光客数は、平成21年に初めて100万人を突破し、平成23年に東日本大震災の影響で減少となりましたが、6年連続して100万人の入込客数を推移しているところです。

(2) 宿泊客数

宿泊・日帰り客別にみると、日帰り観光客が圧倒的に多く、県内でも下位を位置しているところです。

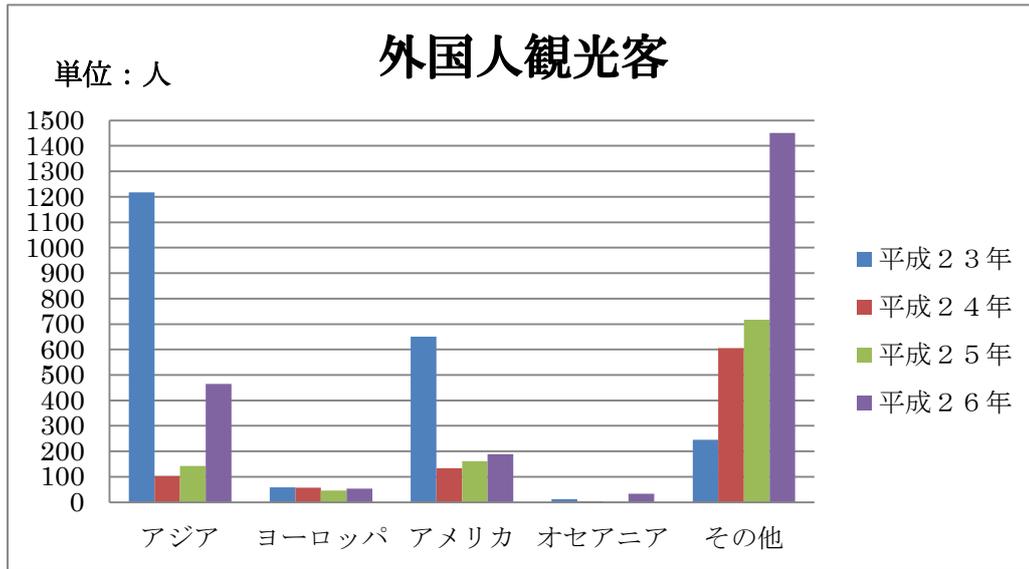


資料：長崎県観光統計

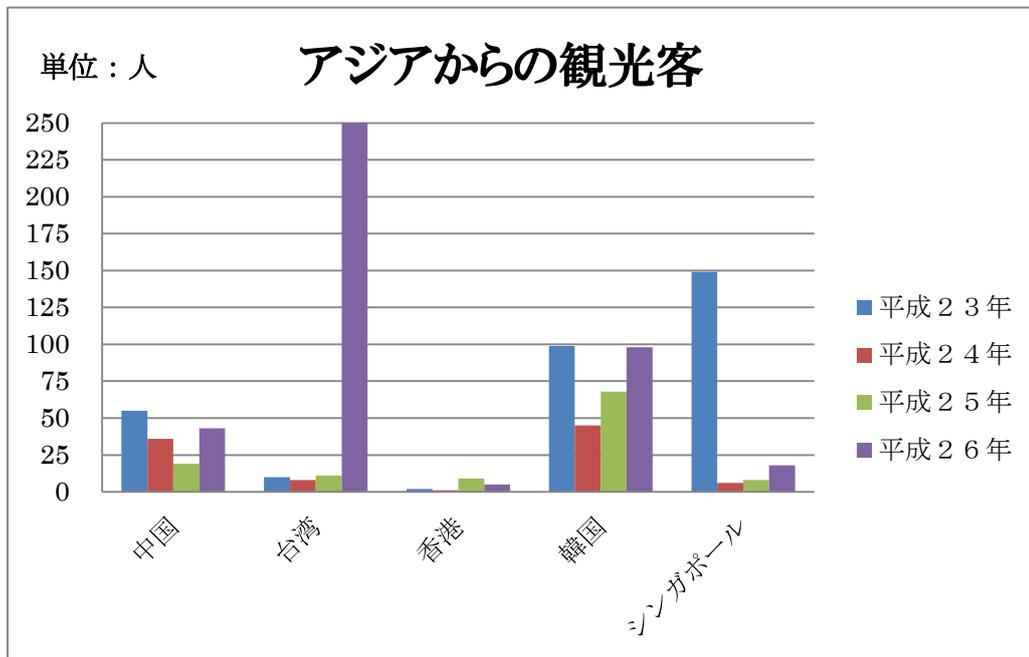
(3) 外国人観光客数

本市を訪れた外国人観光客数は、全国や長崎県の動向と同様、増加傾向にあります。

特に、中国からのクルーズ船の入港、韓国からのLCC旅客機の就航により、中国や韓国のほか、台湾や香港などアジアからの観光客が増加している傾向にあります。



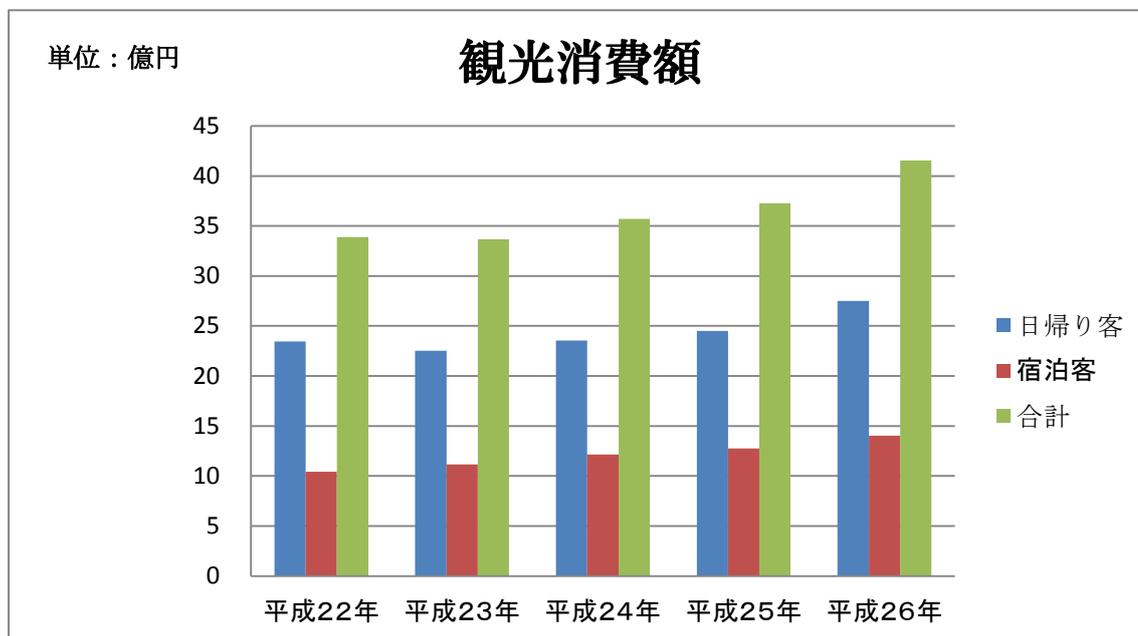
資料：長崎県観光統計



資料：長崎県観光統計

(4) 観光消費額

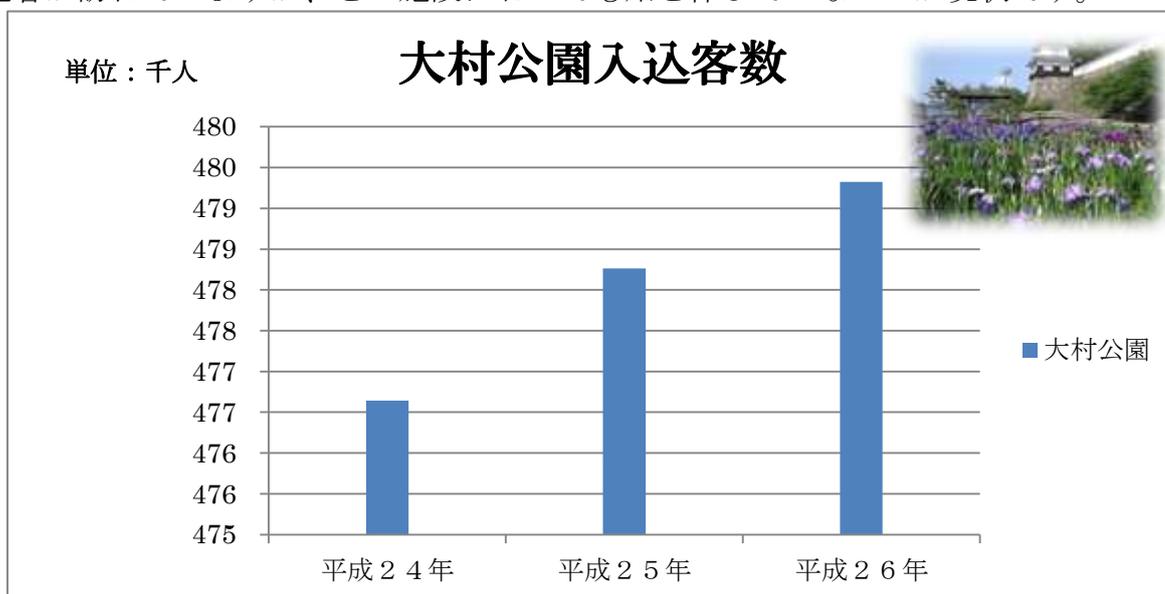
市外観光客や宿泊客数の伸び悩みの状況にあるため、観光消費額も3,400円/人で、21市町の中でも19位と低迷しています。



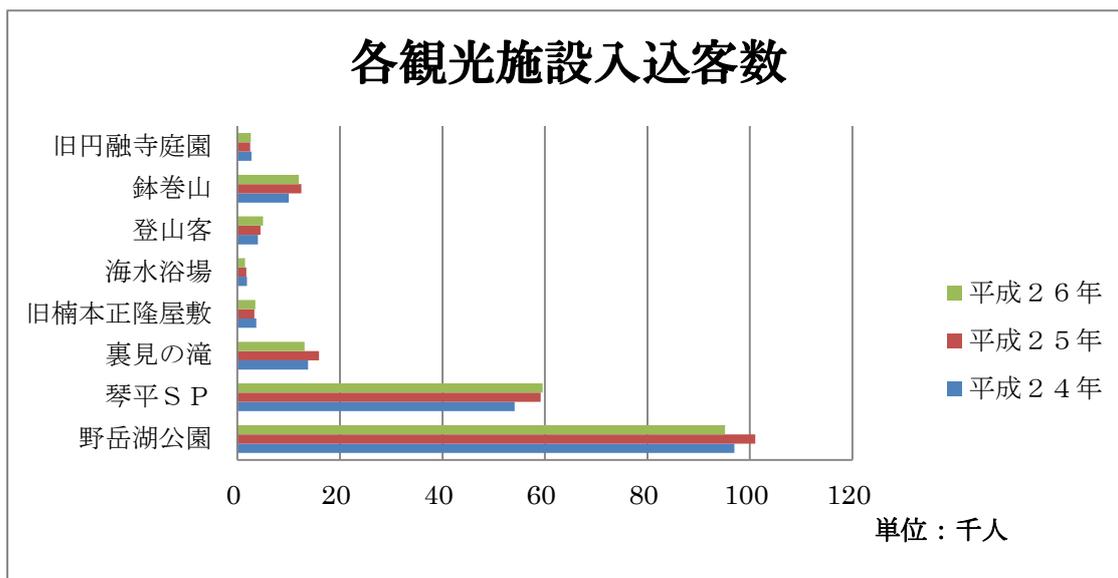
資料：長崎県観光統計

(5) 主要施設の利用者

大村公園には、春の桜から初夏の花菖蒲開花時期を中心に約48万人の観光客が訪れていますが、どの施設においても殆ど伸びていないのが現状です。



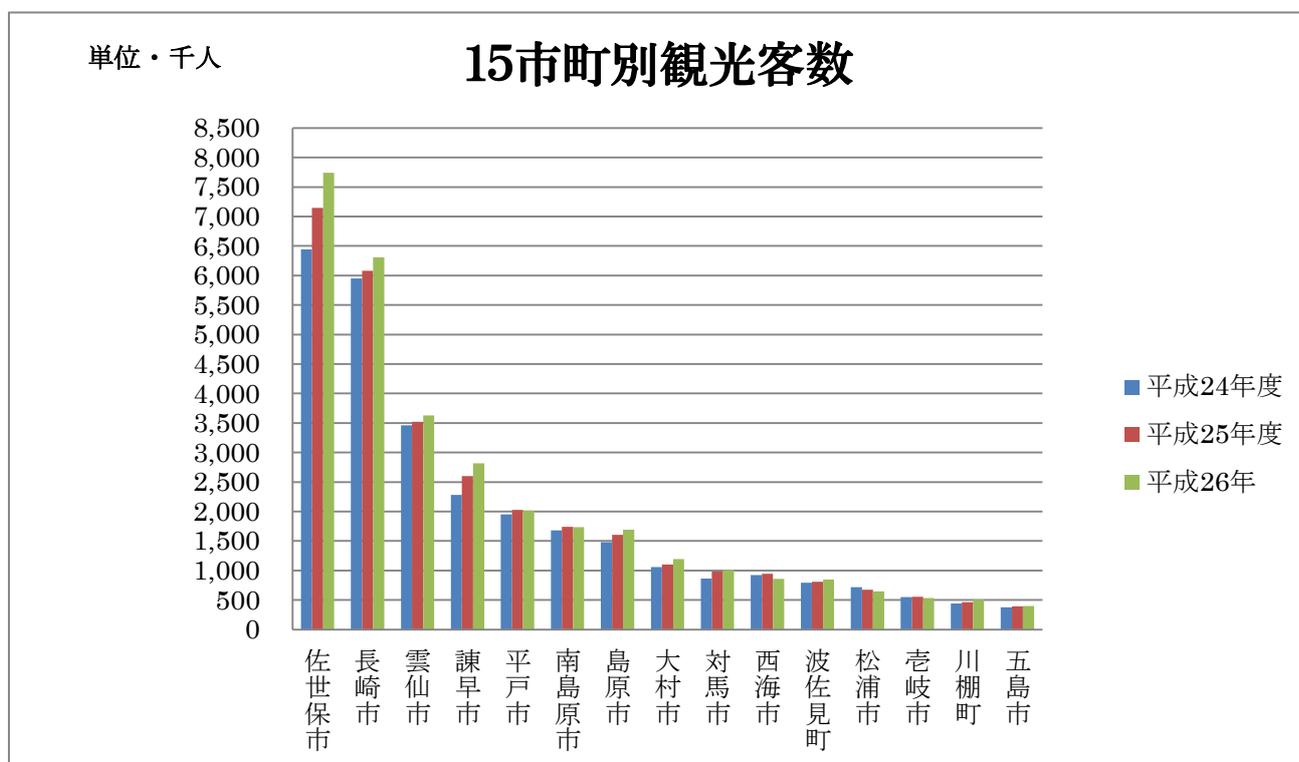
資料：長崎県観光統計



資料：長崎県観光統計

(6) 市町別の観光客数

本市の観光客数は、平成26年で119万人を超え、平成27年の目標値であった115万人を超えたものの、長崎県内21市町の中でも8番目に位置していますが、大幅に伸びていないのが現状です。



資料：長崎県観光統計

2 観光の課題

【地域資源について】

- 海や山など豊かな観光資源、歴史的資源を十分に活かされていない。
- 観光資源を結ぶ二次交通の整備と魅力的な観光コースが整っていない。
- 本市ならではの伝統料理や特産品など、情報発信が不足している。
- 食や土産物となるイメージ商品が不足している。

【観光動向について】

- 観光客数のほとんどは、春が多いため四季をとおして観光できる施設・場所が少ない。
- 滞在型に対応する観光宿泊施設が整っていない。
- 日帰り観光客が8割を超え、滞在型観光に繋がる着地型観光によるメニューが少ないため、観光消費額が長崎県内でも下位を位置している。

【推進体制について】

- 外国人観光客の受け入れ体制が整っていない。(看板、ガイドの育成など)
- 観光客に対するおもてなしの意識が市民に不足している。
- 広域観光の拠点とするため、他自治体との連携が整っていない。
- 観光地としての認知や誘客のための情報発信力が弱い。

3 課題解決に向けての取り組み

(1) 社会的背景と観光の国際化

国内の社会情勢、経済情勢は大きく変化し、急速な少子高齢化・生産人口の減少が進み、定住人口が減少傾向にあります。

観光形態も企業や組織型の団体旅行から個人・グループ旅行へ、観る観光から「癒し」「交流」「学び」など、地域住民との交流やふれあいを大切にする観光へと変化しています。

また、今後、中国や韓国、台湾などアジアからの外国人観光客も増加することが考えられます。

このような、社会情勢の変化に伴い、本市の新たな観光地づくりの取り組みが急務です。

(2)具体的な課題への対応

① 自然を活かした観光の推進

本市は、豊かな自然を有しており魅力的な観光資源が存在しています。中でも、大村公園や裏見の滝自然花苑など、春の桜、シャクナゲから花菖蒲の開花時期は多くの観光客が訪れていますが、花の時期以外は、観光客は少ない状況です。また、年間をとおした誘客の可能性のある野岳湖公園、優れた景観をもつ琴平スカイパークや鉢巻山展望所、日岳展望所など観光客数も横ばいであり、未開拓の状況です。

今後、四季を感じる自然づくりと観光地を周遊してもらうため市民活力や仕掛けづくり、波静かな大村湾を活かした景観クルーズやベイサイドの観光カフェなど、新たな観光資源の活用が必要です。



裏見の滝自然花苑



鉢巻山展望所

② 歴史を活かした観光の推進

本市には、日本初のキリシタン大名「大村純忠」をはじめとする、天正遣欧少年使節やキリシタン史跡、本経寺、旧楠本正隆屋敷、長崎街道（松原宿、大村宿、鈴田峠）、城下町、偉人など、古代から近代まで世界史や日本史に関わる多くの歴史的な史跡や資産が残されています。

このような、魅力的な歴史的・文化的遺産を観光に十分に活かされていないのが現状であり、これらを活用した、新たな歴史観光「さるく」メニュー開発やキリシタン史跡を活用したハード面、ソフト面の整備と歴史・文化をつなぐ広域的な観光ルートの整備が必要です。



城下町さるく



キリシタン巡礼ツアー

③ イベントを活かした観光の推進

本市には、夏の風物詩「おおむら夏越花火大会」や「おおむら夏越まつり」、「おおむら秋まつり」など、多くの祭りが開催されていますが、県外や海外からの観光客を更に誘客する方策が必要です。

魅力的な祭りやイベントとするため、内容の充実と新たなイベント企画へと深化していく必要があります。

また、その他「裏見の滝自然花苑しゃくなげ祭り」や「鉢巻山ひがん花まつり」、「のだけ新茶まつり」等に来られた観光客を、野岳湖周辺の体験施設に周遊や滞在させる仕掛けづくりが必要です。

また、シーハットおおむらや市民交流プラザ、建設が予定されている大村市歴史資料館（仮称）、長崎街道（大村宿・松原宿）を活かした音楽、演劇、映像、フォーラム、シンポジウムなどの新しいイベントの研究に努めます。

④ 食を活かした観光の推進

本市には、伝統的な郷土料理「大村寿司」や「にごみ」、「ゆでピーナッツ」、また、水産物として「ナマコ」や「イダコ」などがあげられますが、知名度が弱く全国的には知られていないのが現状です。

市内には、カレーやスイーツで地域おこしを行っている団体がありますが、今後、カレーとともに、大村をイメージさせる食の開発を行い、食のイベントに繋げていく必要があります。

更には、土産物となるような特産品の開発や食の活かした観光PRが必要です。



大村寿司

⑤ インバウンド観光の推進

着地型観光メニューである「きもの体験」を目的として、台湾や香港から観光客が増加しているところです。

また、「長崎の教会群とキリスト教関連遺産」が世界遺産登録を目前に控え、巡礼ツアーを目的に、長崎県が進めている韓国やフィリピンからのキリスト教関係の観光客など、外国からの観光客が増加することが予想されます。

このようなことから、外国人観光客の受け入れ体制（誘導看板、宿泊施設、食文化、土産品、ガイドの育成など）の整備と滞在時間の延長を図るため、新たな日本文化の体験メニューの開発と広域的な巡礼ツアーの観光ルート開発が必要です。

今後、文化的なイベントなど、国際交流の場として国際交流プラザの活用を検討します。



鈴田牢跡

⑥ 街並み、景観、里山を活かした観光の推進

本市の特性である海（大村湾）、街、里山が近接し、コンパクト性を活かした新しい観光の可能性を持っています。広々とした街並み、種々な街路樹、高さや色に配慮した公共施設、里山に広がる野菜・果樹園、森林資源や暮らし文化、里山のカフェ、工房、民泊など、新しい大村観光資源のポテンシャルと形成状況にも注目する必要があります。

松原・福重地区は、野岳湖周辺のキャンプ場や体験施設、黒木・萱瀬地区の郡川の清流や緑豊かな多良山系、東大村などの農業体験、周辺のカフェやレストラン、工房、多様な宿泊施設など長崎県レベルの新しい観光機能や基点創出のため、滞在型観光となるような観光ルートの開発や施設整備に取り組みます。



琴平スカイパークから
空港を望む

⑦ 二次交通の整備

平成34年春には、九州新幹線西九州ルートが開業される予定となっており、今後、新大村駅（仮称）を基点に、中心市街地や観光施設などを結ぶ路線バスの整備や魅力ある観光地を巡る周遊バスの運行については、バス会社等と連携を図りながら、アクセスの強化を図ります。

また、バスの進入が不可能な場所に立地しているキリシタン史跡や城下町（五小路、屋敷跡、旧宅）等は、タクシー協会等と連携を図りながら、魅力ある城下町・巡礼コースを造成します。

【路線バス運行イメージ図】

